第七章　さらに根を伸ばす

教育委員会

４３歳にして、はじめて教育委員会勤めとなった。配属先は「教育センター」で、広報と情報担当が主な業務だった。

広報の仕事は、これまでの延長線上にあり、まさに得意分野であった。年４回の発行の計画を立て、優れた実践等を取材してまわり、教育の「今」を伝える役目を担った。新聞を印刷する業者を対象に入札・契約などをする業務は、教師ではできない経験だった。随意契約だけでなく一般競争入札も経験した。学校現場では見過ごしてしまっていた事務方の動きの重要さを体感することとなった。教育委員会にいた５年間は、ずっと広報担当を続けていた。途中、150 号の節目を迎えて、記念 CD を作る機会にも恵まれた。

一方、情報担当の仕事は苦労続きだった。特にコンピュータに秀でているわけでもなく、自分でも得意な分野と認識していない中での担当だった。行ってすぐ市内のコンピュータの総入れ替えの時期となり、私は機器入れ替えの周辺業務を任された。IT 技術者の契約と業務管理、夏季 PC 研修の運営が業務内容だった。おかげさまで IT 技術者から PC スキルを教わることになり、また夏季 PC 研修では依頼した業者の研修を一緒に受講することになり、それも何度も何度もやることなったため、こちらもＰＣスキルを高められた。ワープロソフトは「一太郎」だった私が「ワード・エクセル・パワーポイント」に明るくなった。

PC 担当として奮闘したことが２つある。

一つは、全学校のＰＣ室と職員室の間、ＬＡＮケーブルをつないだこと。契約の手違えで、どうしても実施しないとＰＣが動かないとう事態になり、ＩＴ技術者と全５６校を回ってケーブルをつないでいった。まるでネットワークエンジニアのような作業が連日続いた。

二つ目は、全校に残ったプリンタの廃棄の問題だった。こちらは、大急ぎで入札を準備し、入れ替え時期に間に合うように廃棄作業を完了させた。この２つの作業はまるで綱渡りのような感じで、追い立てられるようにやり続けてようやく完遂した。入れ替え作業が無事終わり、私自身のＰＣ担当もお役御免となった。新しくＰＣに長けた方が入ってきてくれたおかげである。

この２つの業務以外にも、「社会科副読本担当」「研修担当」の２つを経験した。また、３年目には管理職試験にチャレンジして合格、４年目には企業派遣研修で浦安にある「東京ベイホテル東急（当時）」で３週間接客業務を行った。５年目の１月には、長期のお休みをいただき、親友の勤務するヨハネスブルク日本人学校（南アフリカ）を訪問し、授業した。

５年間の教育委員会業務で学んだことは沢山ある。まとめると以下のようになる。

・常に全体を俯瞰して捉える視点を持つこと。
・自分だけでわかっているのではなく、上司に理解していただきながら進めていくこと。
・自分の業務は、次の人に引き継いでもらえるように整えながら進めること。
・まさかの時のために、他の人の業務にも関心をもってみておくこと。
・教育は現場だけでなく、予算取りを含めて教育行政が担う部分が大きいということ。

せせらぎ文庫

全海研など、国際理解教育の分野の活動を進める中で、新しい動きがあった。

私が担当者として企画・運営する「子どものための日本語フォーラム」の講師として参加していただいた国際児童文庫（当時）の小林悠紀子さんが主催する「せせらぎ文庫フェスタ」の講師の一人として、夏に中軽井沢で社会科の先生をすることになった。

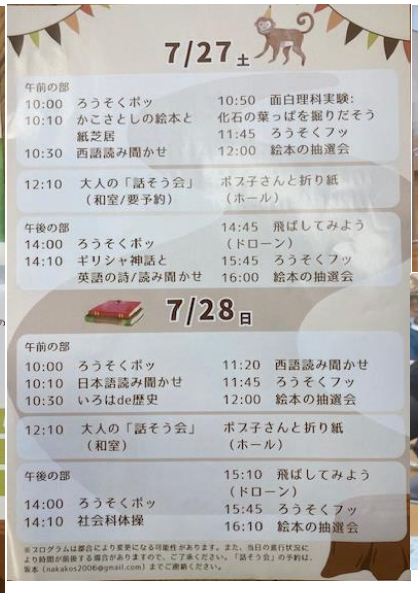
「せせらぎ文庫」は、中軽井沢の千ヶ滝西区公民館を新築する際に、公民館の一角に設置した本が読める小部屋である。ここに、「良い本・みなさんに読んでもらいたい本」を集め、本に親しむ環境を生み出したものだが、この存在を広めていくために、夏休みに「せせらぎ文庫フェスタ」を実施することになった。メインの活動は、日本語や外国語での読み聞かせになるが、せっかくだから理科や社会科、家庭科なども入れて楽しい催しにしようということで「楽しく学ぶ社会科」に取り組んでいた私に声がかかった次第である。

私が参加しはじめたのは第２回からになるが、それ以後ほぼ毎年顔を出してお手伝いをしている。

毎回、ランチタイムには、地元の方々を交えて教育を語る「話そう会」という時間が設けられている。その中で「現場の教師」という立ち位置が珍しく、いつも「松井先生は、その辺りどうお考えになるの？」という質問に向きあっていた。参加した当時は、教諭だったが、教育委員会副主幹→教頭→副校長→校長とステップアップしていった。コロナ禍では、しばらく中断していたが、昨年・今年とまた復活したので、現在は大学教授として参加している。せせらぎ文庫の歴史を見ていくと、自分自身の成長の姿がみてとれる。

私が担当するのは社会科だが、「社会科体操」「いろは de 歴史」に加えて、伊能忠敬の地図で日本地図の大きさを体感する授業を続けていた。毎年同じ教材を使うので、その切り口を変えながら参加してきた。新しい切り口を考える力、幅広い年代・多様な受講生に対応する力、何よりも教育と何か・・・を常にフラットに見つめさせてもらえる機会になっていた。夏の軽井沢は、心も体もリフレッシュできる貴重な時間になっている。

以下は、今年（令和６年）に実施されたもののチラシ（表・裏）と授業風景である。



自分を伸ばす言葉がある

「台湾の出会い」が「フォルモサの祈り～台湾　高雄日本人学校の贈り物～」につながり、全海研の活動をすることになった。（第五章参照）全海研の幹事になったことで、活動範囲が広がり、多くの人との出会うことになった。その繋がりは、千葉大学に来た今でも続いている。ありがたいことである。

自分自身が「記録」にこだわったことが自分自身の未来を開いていくことにつながったとも言える。全海研で事務局次長を務めていたとき、会員に発行する会報誌「ひまわり」に文章を書いた。それが、「記録のすすめ」である。それまでの教員人生を振りかえって書いた文章である。次に当時の文章をそのまま紹介する。

今思えば、そこで自分が伝えた「記録の大切さ」が自分を助けることとなった。今の立場に就いたのも、こうして本（コラム）を書いて若者に言葉を届けられるのも、自分が書き溜めてきた「記録」の積み重ねのおかげである。

自分を伸ばす言葉がある　～「記録」のすすめ　～

全海研　事務局次長　松井　聰（千葉県）

私は、平成１０年度～１２年度、高雄日本人学校（台湾）に赴任した。帰国後、しばらくしてから千海研と全海研の活動に参加し、今も続けている。毎月の全海研幹事会における私の役割は、「記録」である。話し合いの様子、協議の上で決定されたこと、今後の課題などを記録し、各幹事（メーリングリストに登録された方々）に配信している。教師としての仕事の中でもマメに「記録」をしてきたほうであるが、海外派遣へのチャレンジは、「記録」の大切さを再認識することとなった。

今回は、「記録」について、自分の体験を振り返りながら考えてみたい。

「記録」をすすめる理由

帰国後、全海研の幹事として、ほぼ毎年のように在外教育施設派遣内定者研修に参加している。全海研は、派遣を目前に控えた先生方への実践的なアドバイスを行ってきているが、その講師として参加しているのである。そこで、先生方に伝えてきたキーワードがある。それは、「G・E・N・K・I」である。それぞれのアルファベットは、大事なポイントを意味していているが、（もちろん、最も大切なことは、「元気」です！）その中の「K」で「記録はマメに丁寧に」と紹介し、「記録すること」をすすめている。

結論からお話しよう。

私が「記録」をすすめる理由は、「記録」することで、「自分を伸ばす言葉」に出会うことができるからである。その言葉は、自分の視野を大きく広げてくれる。そして「もっと頑張ってみよう！」という元気・やる気や「今まで感じることができなかったものを発見できた！」という驚きを連れてきてくれる。「記録すること」は、自身自身の可能性を広げていくことにつながるのである。私はそう思っている。

決意をもって「記録」する

「記録」することが、どのように自分自身の可能性と関わってくるのか。そこには、まず、「しっかり記録しよう！」という決意が必要である。決意をもって「記録」することでどんな変化が表れるのだろうか。以下に紹介したい。

その１）例えば、人の話を聞くとき。「記録」は人と人をつなぐ。

ただ漠然と聞くのではなく、相手の言葉に耳を傾け、一生懸命に聞くことになる。

「この方が言いたいことは、いったい何だろう・・・。」と記録をしながら考える。傾聴することで、その方の思いに触れ、気づくことができる。「記録」は、「聞く」という力を高め、大切なポイントに気づかせてくれるのである。この時の「記録」は、相手と自分をつなぐ「橋」となる。どこかでこの記録を紹介するときや、相手の方と再会する際に、この「橋」が相手と自分をつないでくれる。この「橋」を渡ってお互いの行き来が生まれ、言葉が持つ「思い」に気づくことになる。「橋」は太く頑丈になっていくのである。

その２）例えば、今日の出来事を振り返るとき。「記録」は、自分自身の再発見を促す。

一日が終わり、今日の出来事や感じたことを記録する。

ふと目を閉じて、一日の流れを思い出してみる。少しずつ、今日あったことが頭をよぎる。今日出会った人の顔を思い出し、会話が蘇ってくる。「そういえば、あれにはビックリしたよなぁ～。」「あの言葉、妙に説得力があったなぁ～。」その日の記録とともに、何かを発見し、何かに気づいた自分自身を再発見する。

その３）例えば、見学地に行ったとき。「記録」は、思いを冷凍保存する。

「記録」をしようと思うと、まず、大切なポイントを知る努力をする。そのポイントに付随して、マメ知識などを列記する。これは、今後どんなふうに広がっていくのだろうか・・・。その先を見通して記録をすすめる。見たものや聞いたことをまとめる際、自分自身が感じたことと一緒に記しておくと、いつまでも臨場感のある「記録」になる。それらの「記録」を重ねていくと、いつしか「以前、同じように感じた場面があったよなぁ・・・」と気づくことがある。冷凍保存されていた過去の自分の思いが溶け出してきた瞬間である。しっかりと保存しておかないと、同じ状況でも気づかないものである。

以上、３つの例で示したことを、海外で外国語を学ぶことにたとえてみると、こうなる。

海外から戻ると、「外国に３年も住んでたのだから、そこの国の言葉を覚えたでしょ！」と言われることがある。ただ住んでいるだけでは決して言葉は身につかない。これは、行っていた人にしかわかないこと・・・。覚えようと必死に努力するか、強制的に覚えなくてはいけないような状況に追い込む以外、身につかないものである。これは、何も語学だけに限ったことではないと思うのである。全てとは言わないが、決意をもってしない限り、ほとんどの物事は身につかない。「記録」もまたしかりである。

「記録」が「思い」に届く

ここで、私自身の決意をもった「記録」が、思っていた以上の広がりをみせていった例をご紹介したい。

①高雄プレス（高雄：毎月発行の日本人会機関誌に投稿）

台湾の高雄日本人学校に赴任し、中学部の「総合的な学習の時間」を担当していた頃、現地の旅行記を高雄プレスに投稿した。その後、現地の方々との出会いについて、毎月投稿し、連載物として掲載していただいた。書いていくことで、台湾で出会った方々の思いを紹介したいとの願いが膨らみ、更に新しい出会いにつながっていった。

②台湾の出会い（高雄：派遣のまとめとして発刊）

帰国が迫った頃、これまで投稿した原稿をまとめて１冊の本にすることにした。まとめてみて、気づいたこと。「ことば」には、人を伸ばす、変える、勇気づける力があるということ。私は、出会った方々の言葉に励まされ、派遣教員として赴任した意義を再確認することができた。そこで、製本する際、自分に力を与えてくれた代表的な言葉（思い）を表紙の中に引用した。

Ａ　海外から自国を見る。しかも他国の人の目の高さで見ることで見えなかったものが見えてきた。

Ｂ　同じ目の高さでつながった時に、さらに新しい人との出会いが始まる。

Ｃ　松井さん、あんた台湾の想いを日本に伝えてくれないだろうか・・・。

③フォルモサの祈り（日本：派遣の総まとめとして創友社から発刊）

帰国後、上記の「台湾の出会い」などをもとにして、「フォルモサの祈り」を発刊した。これは、創友社の「国際理解教育選書シリーズ」の第８作目にあたる。選書シリーズのことは知っていたが、自分が出すことになるとは全く思ってもいなかった。決意をもって「記録」したことが、「台湾の出会い」の投稿となり、それらが本となっていった。本につまった思いは、それを手にした人の心に届く。改めて本を読み返すと、派遣前「台湾と日本の架け橋になりたい」という自分自身の思いに届いた。小さな努力がいつのまにか実を結ぶということを実感することになった。

自分を伸ばす言葉

今日、何かを「記録」することで、すぐ何か大切なことに気づくわけでもない。明日、しっかり「記録」をとったからといって、すぐ自分を伸ばす言葉に出会えるとは限らない。ただ、少し辛抱して「しっかりと記録する」ことを続けてほしい。いつの日か、自分の心に響く言葉に出会う。他の人にとっては、何気ない言葉の中にとてつもない力が潜んでいることに気づく。その言葉に出会い、言葉を発した方の思いと向き合う。そして、自分が

勇気づけられ、「また頑張ってみよう！」と元気になる。それが、「自分を伸ばす言葉」なのである。

　帰国してから９年目。海外で暮らしていたのはずいぶんと前のことのようにも思えてきた。しかし・・・。当時の思いは「記録」の中に、そして自分自身の中に冷凍保存されている。きっとこれからも、在外派遣へのチャレンジが気づかせてくれた「自分を伸ばす言葉」に気づくだろう。「なるほど・・・。あの先生を動かしていたのは、この言葉だったのか・・・。」
　その時が楽しみである。

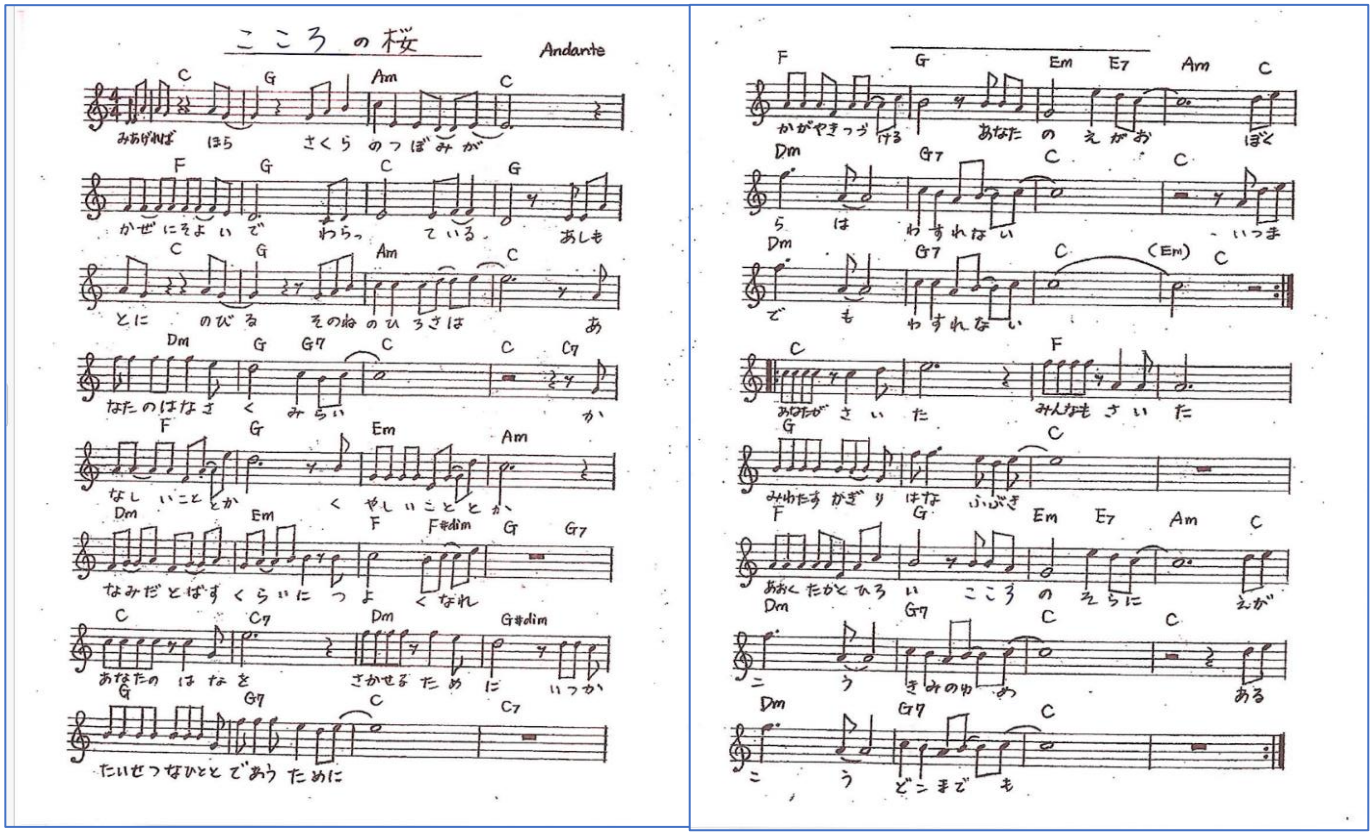
こころの桜

　教育委員会で５年間務めた後、Ｏ中学校に３回目の赴任となった。２回目、高雄日本人学校から所属するＯ中学校に戻った時から１０年が経過していた。今度は３０周年を迎えることとなった。（ここでも周年行事担当でした。）
　任された役割は、再び生徒指導主任だった。前回は、教え子の弟・妹に助けられたが、この時はPTAや地域の方々が力になってくれた。中学校が拠点となり、地域と学校をつなぐ行事「クリーン グリーン マイタウン」という清掃活動は、ずっと続いていた。私にとって「地域とともにある学校」は、この行事がベースになっている。
　生徒指導の面では苦労することも多かったが、校長先生のリーダーシップの下、教職員のチームワークは抜群だった。若手が中堅を頼りにし、中堅が引っ張る。そして、ベテランがしっかり支える。まさに「チーム学校」という姿だった。
　その年の卒業生にむけて歌を作った。タイトルは、生徒指導主任として発行していた「生徒指導だより」のタイトルでもあった。この歌は、予餞会（卒業生を送る会）の中で同僚にギターを弾いてもらって、熱唱した。それ以後、お隣のＯ小学校に校長として赴任した際には、学校だよりを同じタイトルにした。機会あるごとに児童にも歌を披露していた。
　ある時、「なんで『生徒指導だより』で使った題名が『学校だより』と同じなの？」まるで、「何も考えてないんじゃないの？」と言わんばかりの指摘を受けたことがある。自分の中では、全く変ではなかった。それは、私自身が大事にしていることが全くブレてなかったからそうなったということになる。たまたま生徒指導主任から校長へと役割が変わったが、以前と同じ価値観で教育と関わっているので、変える必要がなかったということになる。教諭時代と同じ気持ちで、同じことを大事に思って学校経営ができている（校長を務めている）ということであり、むしろ、変えてなるものか・・・くらいの勢いだったと記憶している。
　ちなみに、校長として卒業文集に寄稿する場合は、ずっとこの歌詞を添えてきた。学校が変わってからは、「こころの桜」と読み替えて記載してきた。この「こころの桜」は、折に触れて様々な場所で披露している。令和５年８月には、初任校で一緒だった３年４・５・６組の担任が「４５６会３０周年記念コンサート」と銘打って、プライベートコンサートを開催した。「こころの桜」を皆さんに披露した。これも恩返しの一つである。

こ こ ろ の 桜

作詞・作曲：THE　THIRD　FRIENDS

見上げれば　ほら　桜の蕾が　風にそよいで笑っている
足下に伸びる　その根の広さは　あなたの花咲く未来
悲しいこととか　　悔しいこととか　　涙飛ばすくらいに強くなれ
あなたの花を咲かせるために　　いつか　大切な人と出会うために
輝き続けるあなたの笑顔　　僕らは忘れない　　いつまでも忘れない

目を閉じて　　ほら　　浮かぶ友の顔　　汗にまみれた 夏の日々
立ち止まり 悩む　　自分は誰なの　　どこに向かっているの
人を傷つけ　　やがて気が付く　　一人一人大事な花なんだ
あなたの花を咲かせてみよう　いつか　大切な人の花とともに
思いはつながるこころの桜　　また会うその日まで　　想い出をありがとう

あなたが咲いた　　みんなも咲いた　　見渡す限り花吹雪
青く高く広い　こころの空に　　描こう 君の夢　　歩こう どこまでも
あなたが咲いた　　みんなも咲いた　　見渡す限り花吹雪
青く高く広い　こころの空に　　描こう 君の夢　　想い出をありがとう